

異文化コミュニケーションと共生

奈倉道隆

Inter-cultural Communication and Symbiosis

Michitaka NAGURA

Inter-Cultural Communication is important in today's society that is changing to be global. It is important for the relationship between youth and elderly, and normal and handicapped as well as different countries or nations. To the student who is going to work in the business area in their future, it is getting serious point for today's university-education.

Then philosophy is necessary for the education of inter-cultural communication. Symbiosis on Buddhism gives many suggestion to that philosophy.

Tokai-Gakuen University gives the lecture and exercise of thought of symbiosis on Buddhism. It is getting more obvious that the thought contributes to promote the education of inter-cultural communication.

§ 1 現代と異文化コミュニケーション

世界が一つに結ばれていくグローバル化が進み、異なる地域の人と人との交流がさかんとなった。人間は単なる生物と異なり、生活文化をもって生きている。地域が違えば生活が異なり、違った生活文化が形成されていく。そして、異なる文化をもつ人と人、あるいは集団相互の間で文化の壁が生ずる。これによって円滑なコミュニケーションがはばまれやすい。しかし最近では、文化の壁を越えてコミュニケーションを円滑に進めなければならないことが多くなった。又、異なる文化に属する人と人との交流は、緊張も生じやすいが、新鮮なふれあいによって相互の自己改革が進んだり、創造性が高まることも経験されるようになった。若者の国外留学が奨励されるのはそのためである。

生活文化の違いは、国や民族の違いによるだけではない。同じ国でも地方の違いで差が生ずる。また、最近では同じ地域でも世代が違えば生活文化が異なるようになった。とくに高齢者は副次文化 (subculture) を形成することが多い。そのような違いを理解し、互いに認めあう姿勢をもたないと世代間のコミュニケーションは円滑に進まない。

わが国では、従来は青壮年を中心とする文化の中へ高齢者も統合しようとしてきた。しかし

高齢化が進展すれば無理な統合化によって、適応できない人を生ずるようになるだろう。互いに他の世代の特性を認めあい、違いを大切にしつつ調和を求める努力が必要となる。のちに述べる「共生」が重要となっていく。

また、国際化が進む今後は、職場や地域で文化を異にする人との接触が多くなるであろう。生活習慣の異なる人との交流には、お互いに他者の生活文化を尊重して、友好的な態度をとることが求められる。そして、情報化が進む現代は、情報のみの交流が活発化する傾向にある。情報には多くの背景があり、これが切り離されて伝えられる情報は、その意味が正しく伝わらないことが懸念される。発信する側も受信する側も、そのことに留意してコミュニケーションをとることが大切である。

§ 2 異文化コミュニケーションの課題

異文化間のコミュニケーションでは、同文化間の場合と違った配慮が必要である。お互いに相手が発信する言語や行動のメッセージを、自分の文化ではなく相手の文化と関係づけて理解する必要があるからである。また、自分の意思を表示する際にも、人間関係や状況判断を重視し、相手に正しく理解されるように工夫する必要がある。外国語を知っているというだけでは、十分なコミュニケーションはとれない。言葉によるメッセージだけでなく、非言語的メッセージを送ったり、受けとめたりする能力が求められる。また、相手の立場にたつてものを考える感性や、相手がこちらに伝えたいと思うことが理解できているかどうかを確認する思いやりが必要である。

異文化コミュニケーションは、大陸の国々のように異文化交流が頻繁に行われてきたところではめあたらしいことではない。しかしわが国のように島国であり、ごく最近まで外国人と接する人が限られていた社会では慣れていない。海外旅行や外国人との交流が市民レベルで活発化してきた今日、ようやく身近な問題となった。今後は、企業が多国籍化したり、外資系の企業が増加したり、外国人労働者の移入などが盛んとなるので、日常的な仕事や生活面での異文化コミュニケーションが活発となるだろう。

わが国にとって問題となるのは、異文化の人たちへの対等感が弱いために、平等なコミュニケーションがとりにくいということである。というのは、有史以前より海外の文化を傾斜を設けて移入する習慣があり、そこには対等な相互関係が乏しかった。明治以後においても、欧米に対しては崇め、アジアに対しては劣等視する姿勢がうかがわれた。国内においても、対人関係では序列を重視するため水平方向のコミュニケーションがとりにくい。また、うちそとの区別がなされ、そとの世界の人、いわゆるよそ者に対する差別的な態度も保たれてきた。こうしたわが国の生活文化の特性を自覚し、これを克服する努力をしなければ異文化交流に障害を生

ずる。互いに異文化を対等に尊重すること、少数文化を軽視したりしないことが大切である。

また、異文化コミュニケーションでは文化の違いによる問題を生ずることが多い。これのできる限り防止する努力をしながら問題は誠実に解決していくことが必要である。

§ 3 共生への志向

最近「異文化の共生」ということが重要視されるようになった。広田康生氏は『異文化コミュニケーション・ハンドブック』（有斐閣1997年）の中に「異文化が共生できる社会」と題する稿を草し、次のように「共生」の重要性を強調しておられる。「生の形式を異にする人々が、互いの自己実現のために、相互の〈絆〉を築き上げてゆける関係の成立」が共生であると。これからの社会では、共生関係が築ける人になっていくことが大切である。

それを大学教育の中にとり入れている例を紹介しよう。1995年に開設された東海学園大学（愛知県）は、1学年の定員が200名の経営学部のみのものである。人間教育を重視し、「共生人間論」「共生人間論実習」という教科が設けられている。この実習は5～6名のグループに分かれ、高齢者の病院や入所施設、障害者の作業施設に4～5日間通っておこなわれる。目的は学生が共生の体験をもつことであり、若干の事前教育はおこなうが、特に何をしなければならないというしぼりはない。学生が自発的に高齢者の身のまわりの援助をしたり、障害者の作業に加わっていっしょに仕事をするようになる。徐々に対話が生まれ、心の通うコミュニケーションがもたれるようになることが多い。

実習を始める前は、経営学部の学生が何故このような実習をすべきなのか疑問に思う者も少なくない。しかし、高齢者にしろ障害者にしろ、今まであまりかかわりをもったことのない人々と出会い、とまどいながらもコミュニケーションをするうちに、相手への理解と自分自身への洞察が進むようになる。自分が意識的に差別することはなかったが、ふりかえてみると障害者や高齢者を、かかわることのできない人として敬遠していた自分に気付く。と同時に、障害があっても、高齢であっても、自分と全く同じ人間であること、対話やふれあいを通して、コミュニケーションの喜びを感じずる人に変わっていく。これは言葉だけの話し合いではないということが重要である。食事介助や車椅子移動などの動作をとまなう交流であったり、厳しい仕事場での共同作業を通しての交流であるところに、深いコミュニケーションが実現する鍵があると考えられる。介護や作業の動作は未熟であるが、それが多少でも役立ち、相手から喜びや感謝の気持ちが表現されることによって学生は感動を受け、さらに自発的な活動が誘発されていく。学生の自発性と協調性がたかまることも成果の一部と考えてよいだろう。

学生の中には、能力がないと思いついでいた知的障害者や身障者が、ハンディキャップを克服して忍耐強く作業したり、単純な仕事の中にも喜びを見出す場面をみて感激する。そして共感から生まれる対等なコミュニケーションの喜びを味わい、人間観が変わる学生も少なくない。

また言語障害をもつ人とのコミュニケーションを志し、手話を覚える学生も少なからずいる。

21世紀のビジネスの世界で活躍する学生に共生を志向させるのが主な教育目標であるが、異文化コミュニケーションへのかまえ作りにも役立っているのではないかと考える。

§ 4 仏教思想に基づく共生

東海学園大学は、教育の基本理念を「共生」としており、これを体得するための実習と、知性・感性を共に育てる総合演習が少人数教育で1年から4年まで一貫しておこなわれている。

共生という言葉は、最近各方面で使われるようになったが、その概念は多様である。単なる共存をめざすものであったり、ときには競争による共倒れを回避するための妥協を意味する場合さえある。

東海学園大学の教育における共生は、仏教思想をよりどころとし、ものごとの相互関係性を活用して力動的な発展をめざすものである。

浄土宗の大本山増上寺の法主をされ、東海学園長を長く勤められた椎尾弁匡師(1876-1971)は、仏教の根本思想である「縁起」を「共生」と表現され、1922年には「共生会」を組織されたりして仏教の現代化に勤められた。仏教では、すべてのもごとが相互依存関係によって成り立っていることを縁起と称する。たとえば植物が放出する酸素が動物を生かし、動物が放出する炭酸ガスが植物を育てる、といった生態学的な事実などで説明される。

椎尾師は、共生をわかりやすく「ともいき」と呼ばれたが、共生の生は単に生きるということではなく「生まれる」ことだと説明された。仏典に「共生極楽成仏道」(四弘誓願)とか、「願共諸衆生往生安樂国」(往生礼讚)と記されていることを出典とされている。共に極楽に生まれるとか、共に安樂国に往生するということは、理想をめざして自己変革をとげることと理解される。仏教で「生まれる」ということには二つの意味があり、その一つは分断生である。これは、胎児が母胎から生まれる出るときのような生の形の変化である。もう一つは変易生とよばれるもので、真理に暗かった人がめざめた人になるというように、内発的に自己変革が起きることを意味する。椎尾師の理解が後者であることは申すまでもない。つまり、共生は、人々が互にかかわることによって共に目覚め、向上していくことである。

浄土宗の勸学であった恵谷隆戒師は、『往生浄土の理解と表現』という書物(参考文献参照)の中で、「念仏するたびに如来と我とが互に返照しあい、働きあうことによって、香り高い人格を形成していくのが往生である。人格形成作用は、平生に始まり、臨終に完成するものでなくてはならぬ。」と述べておられる。念仏という、仏に向かって心を開き仏と交流しあう実践が人格向上をもたらし、往生がすすめられていくという理解である。それは平生に始まり、昨日よりは今日、今日よりは明日と人格が高まる「生まれ変わり」が続く。そしてやがて臨終の日には、この世からあの世へと生まれ変わり、往生が完成すると説明しておられる。

このような視点に立つならば、仏に向かって心を開き、理想をめざして人間向上をはかる仏教教育は、極楽（理想世界）へ往生を願って念仏する浄土の教えと一致するものといえる。そして、人間向上を、孤立した人としてではなく、目標を共にする人々と共に達成しようと志すのが共生である。文化を同じくする人も異にする人も、ともどもに交流し、コミュニケーションをはかることによって互に発展しようとするのが共生の特色である。

異文化コミュニケーションは、このような共生をめざすことによって発展的な充実をとげるであろう。国際化・高齢化が進むわが国の社会、さらに世界に向かって、共生をめざす異文化コミュニケーションを奨励することが、いま求められているように思われる。

参考文献

藤吉慈海編『往生浄土の理解と表現』知恩院浄土宗学研究所、1966年8月

奈倉道隆「インフォームド・コンセントとメディカルソーシャルワーク」『医学哲学・倫理学』13号、日本医学哲学・倫理学会、1995年10月

奈倉道隆「お年寄りの心とカウンセリング」『ブックレット福祉ナウ』朝日新聞社厚生文化事業団、1997年6月

石井敏編『異文化コミュニケーション・ハンドブック』有斐閣、1997年1月

奈倉道隆「介護関係の確立と自立生活の支援」『介護福祉学』4巻1号、日本福祉学会、1997年9月

奈倉道隆「浄土教に基づく共生思想と大学教育」『印度学仏教学研究』46巻2号、日本印度学仏教学会、1998年3月